

青い炎

月の裏で逢いましょう
の囁き

弥馬都__YAMATO

初めに～

弥馬都__YAMATOです

ちょうど今から13日前に『月の裏で逢いましょう』という本に
ただ想いのままに書き留めた詩だか 呟きだか 希望だか 絶望だか
一言で言い表すには難しい気持ちを毎日 綴ってきました。

公には一切宣伝してないにも関わらず覗いて下さる人がいるコトに感謝しています

男とか女とか性別も 年齢も 何も明かしていないのは
私の詩集を覗いて下さった人がそれぞれに
思い浮かべてくださったのが私そのものだというコトで
想像の中の人物としてとらえていただきたいからです

今回二冊目に当たる『青の炎』は
ある人から贈られた題材をそのまま使わせていただいたものです

私は月が好きです

愛しているのかわからないけど 月に恋しています

太陽と月は決して交わるコトなどないのだけど・・・

本作りも構成も何もわからないまま
ただ本当に想いのままに書いてます

この本は何か言葉や題材的な台詞
決められた登場人物などのお題をいただいて
私なりに書いていこうと考えています。

それから『月の裏で逢いましょう』に綴っている

詩への想いなども書くかもしれません

もし良ければ何か私に言葉を下さい
メッセ欄にでも『死』『空』『華』や
たとえそれがあなたの愛する人の名前でもかまわない……。

私の想いを交えた
詩だかなんだかわからない文面に その言葉と
あなたの想い綴らせてくださいますか？

覗いてくれて ありがとう。

この瞬間にだけ
私は自分の存在を感じます……

青い炎～其の一

青い炎～其の一

私の場合

少し渋めの藍色の呂の着物に
お気に入りの帯を
 キラッ！
と結んで
下ろしたての真っさらの白い足袋を履いた。

待ち合わせの場所には
いつもは15分以上も遅れてくる　あなたが
腕時計を何度も何度も覗きこみながら

私の姿を探しているのかと
勘違いしたくなる程の強い視線を
人混みに向けているのが見えた

そう・・・
あなたが気にしてるのは
 うっかり知り合いにでも会いやしないか・・・

という
つまらない理由からね

私は小さく手を挙げて　周りを気にするコトもなく
あなたに近づいた。

着物を羽織っていても
相変わらず私は おしゃべりで
今日くらいは大人な女を思い切り気取ってやろう
という私の中の小さな計画は
既に失敗だなあ～と感じていた。

少し離れて後ろに立つ私
順番がきてタクシー乗り込んだ

乗り込んですぐ私は
また いつもの皮肉めいた口調であなたに

タクシーの順番は あっ！という間にまわってくるのにね～

私はワザと明るくおどけて言った

いつもそうだ。

いつだって そう・・・

聞いているんだか

聞こえないフリしてんだか・・・

あなたは表情一つも変えやしない

まっ！いいかあ～

私も可愛くない言いかたしちゃったしなあ～

と また私は明るく幸せそうな笑顔を隣のあなたに向けた

タクシーは目的地に向けて走りだしている

2011/08/09 13:30記

俺の場合

家を出るのは比較的簡単だった。

いつものように普通の会話に

変わり映えのしない パンと卵の朝食

変わったといえば

コーヒーが

インスタントになったコトくらいだなあ～

そんなどうでもいコトを考えながら

何時もより不味く感じるコーヒーを流し込んだ。

別に隠すようなコトじゃない・・・

そう自分に言い訳するかのようにな度も心の中で呟いた。

今日は接待があるから遅くなる

そう言ってスーツ姿で玄関に向かい家を出た

待ち合わせまでの夕刻時間までには

十分すぎるくらいの時間と暇を持て余した俺は

まさかこの年になって行くコトになろうとは思ひもしなかった

漫画喫茶に足を止めた

今頃、君は何をしているんだろうか・・・

そう頭の片隅でぼんやり考えながら
やがて俺は座り心地のいい漫画喫茶の個室の中で
眠りについた・・・。

少し早く着き過ぎたかなあ・・・。

俺は自分が何故か少年に戻ったような気さえしていた

そうか・・・

あんな今時の若者が行くような場所にいたからかな。

と自分でも少し笑いそうになりながら
大勢の人が行き交う流れの中に君の姿を探した

きゃしゃでいて
まるで血管まで透けるような白い肌を持つ君は
藍色の着物を
まるでワンピースでも着るような感覚で着こなし
一際目立つ存在として俺の目の前に現れた

黙っていれば大人の色気さえ感じるのに

相変わらず挨拶もそこそこに楽しげに話しだす

タクシーに乗り込むと君はまた僕を困らせるような台詞を
何の躊躇いもなく口にするんだね・・・

僕はいつも答えに困って
今日も聞こえないフリをした。

タクシーは目的地に向かっている

2011/08/09 18:55記

其の二に続く

青い炎～其の二

青い炎～其の二

間もなくタクシーは目的地に着いた

わあ～

人が大勢いるわねえ～

わたしは思わず声をあげた。

本当だ。こんな不景気な時代なのになあ・・・

そう言った言葉の中にも何だか年を感じるなあ～

と ふと 俺は寂しさがよぎった。

二人は屋形船に乗り込み

差し詰め小一時間の幻想的な小さな旅に漕ぎだした。

其の三に続く

2011/08/15 17:45記

青い炎～其の三

青い炎～其の三

嵐山をバックに
間もなく鵜飼は始まった

それは千年の昔から続く
京の夏の風物詩。

かがり火が焚かれる中
中型の屋形船に乗り込み
嵐山の夜景と鵜飼漁を楽しむ
ちょっとした 大人だけに許された
夏の日の贅沢。

川岸からの見物客は
若いカップルから 近所の子供まで様々だ

私の場合

今日、迷った末に着物を選んだ。

本当は二週間前に京都に誘われた時から
準備していた着物。
夜の闇に溶け込むような深い藍の色

帯結びも 髪を軽く結いあげるのも
私は日常の中で慣れていた

そう・・・

だから鎧のように私を包む この衣が
肌から剥ぎ取られたとしても
差し詰め困るコトはないのを承知していた。

2011/08/17/ 21 :

15記

其の四～俺の場合に続く

青い炎～其の四 俺の場合

俺の場合

やはり誘って正解だったな・・・。
とても楽しげな無邪気な顔で
鵜飼の様子を眺める君を見ながら
俺は満足だった。

着物で来られたら
予期せぬ
いや本心では期待している
この先の逢瀬を考え
普通の男なら眉の一つも しかめたかもしれない。

でも俺にはそんなコトはどうでも良かったんだ
ただ君とこうして過ごす時間が
俺の平凡で退屈な時間の中に存在するだけで・・・。

鵜船の横を櫂で叩く
バーン バーン
という派手で強い音を合図に鵜は一斉に川に潜る

鵜の 喉には紐が巻かれている
紐の巻き方により
その鵜の吐き出す鮎の大きさが変わる。

その決められた大きさよりも小さい鮎は
鵜の胃の中に落ちる寸法になっている。

その説明を聞いた時に

トリと言えども何か報酬がなければ
あんなに必死に 魚を追わぬものなんだな・・・
ゆくゆくは君を手に入れようとしている 俺に似ているなあ

と馬鹿げたコトを 少し自分と鵜を重ね感じていた

それと同時に
恐ろしいくらいに美しい君の横顔を眺めている

こんな大人びた表情は 今までになかったな

かがり火に照らされているせいなのか？

少しの酒がそうさせているのか・・・。

2011/08/20 11:

05 記

其の五～に続く

青い炎～其の五～私の場合　そして・・・。

青い炎～其の五～私の場合　そして・・・。

かがり火の光に驚き　動きが活発になる鮎
その鮎の鱗が　かがり火の反射と月明りにより　光る。
キラキラと水面(みなも)に光る目標に向かい鵜は泳ぐ

一瞬で呑み込み　食道で気絶させるので
鮎は鮮度を保ち傷がつかない。
鵜を扱う鵜匠(うしょう)は手応えだけで　それを悟る
喉に巻かれた紐を手慣れた様子で自在に操りながら・・・。

いつものように　はしゃぐのも忘れて
幻想的に夜を照らし出す　かがり火を
私は　ただ見つめていた。

かがり火の中に時折見え隠れする
青と赤の彩(いろ)

私の中で燃えている炎の色なのかしら・・・。

なら差し詰め飲み込もうとした魚を
無理やり吐き出さされる鵜は　私・・・？

いや、少し違うなあ～
私は彼に逢う度に　好きだの
ずっと考えてたのよ　とか言っている
言葉を今ここで　吐き出さなくても

彼は解ってくれているはずだから～

そんな妙な自信めいた気持が
何処からともなく湧いてきた

当然のように その後、二人は抱き(いだき)あった・・・。

20

11/08/24 12:30記

其の六～へ続く

青い炎～其の六～紅色(べにいろ)

青い炎～其の六～紅色(べにいろ)

私が鶺鴒で見た炎の色は
この色だったのかしら・・・？

さばけた今時の女を演じていた割に以外と古風な所があった
チャンス？やキッカケが無かったわけではないが・・・

そんな事をぼんやりと考えながら
白いシーツに赤の炎の色を確認した私は
また
鶺鴒で見たかがり火を思い返していた

そう

逢瀬の最中に
確かに私は聞いた・・・。

私・・・？
あの人が私を呼ぶ声を

あれは誰？

ま、ゆ・・・

最期の一文字がききとれなかった

けど・・・

あれは私と違う誰かの名前。

ああ・・・

だからなんだは～

あなたは私を『まゆ。』と呼ぶ。

私の名は

繭香(まゆか)・・・

其の七～に続く

20011/09/02 13:20記

青い炎～其の七～鶺鴒

青い炎～其の七～鶺鴒

ああ・・・
だからなのね・・・。

あなたは私を
「まゆ。」
と、呼ぶんだ

違う顔
違う身体
最期の一文字だけが・・・
私と違う名前。

この人は毎晩のように その名前を呼んでいるんだ・・・

偶然かしら？
それとも・・・

ふと目を向けると
日に焼けた男の顔が私の瞳に映った。

何だか・・・
狩りを終えてグッタリした さっきの鶺鴒のようだは・・・。

そう考えると同時に
私の指先は紐になった。

その細い紐。

いや・・・指先は

ここにいるグツタリしている浅黒い鶺鴒の首に巻きついた

このまま軽く締め上げてみようかしら。

また

かがり火が私の中で揺らめいた・・・。

喉を縛りあげられようとしている鶺鴒は

呑気(のんき)にも軽く寝息をあげている・・・

其の八～へ続く

2011/09/07

記

青い炎～其の八～炎の色。

青い炎～其の八～炎の色。

少し悪戯心が芽生えたが
すぐさま白い紐と化した私の指先は
無防備に横たわっている 大きな鶉から離れた

シャァー！

と、カーテンを勢いよく開けた。

月が妖しく光を放っていた

今夜は満月か・・・。

私は素早く身支度を済ませ 彼の元に近づいた

おはよう！お寝坊さん！

わたしは
いつものようにワザと大袈裟に はしゃいで
そして少女漫画でよく読む場面のように
彼の鼻を少しつまんで起こした

ねえ。そろそろ帰んなきゃ電車
なくなっちゃうよ～！
急いで～

目を擦りながら
ゆっくりと起き上がる彼。

わたしの中には
まだ、青だか赤だかわからない炎が
燻ぶったように燃えているのも知らず・・・。

この炎はやがて
赤い炎のまま
わたしの熱情と共に消え去る日が来るのだろうか？

それとも青い炎と化し
何もかも焼きつくす
恐ろしい感情へと変わるのだろうか・・・

わからないは・・・

わたしは小さく呟いた。

20

11/09/17記

青い炎

終。

『青い炎』

案外サラットした感じに終えてみました。

「青い炎」という言葉を最初聞いて 私が連想したのは
「鵜飼のかがり火」でした。

嫉妬の炎 とか 焼きつくすような愛憎劇でもなく
幻想的で幽玄的な青い炎。

「青」にも様々な青色があるように、一つの言葉を扱うにしても
人それぞれ。

自分自身も日によって言葉から連想するものも変わります。

このまま不定期更新で書いていた

『青い炎～月の裏で逢いましょうの囁き』を 終わらすコトも考えたり
その後～

という形で続けていくか 正直、今、悩み中です。

最初は詩としてこの「青い炎」という言葉を取り入れて書いてみようか？
とも考えていたんですが、今回も詩の本出した時と同じように
何の計画性もなく 小説風に書きあげてみました。

本来なら、二人の逢瀬の描写や、知り合った経緯等も
詳しく綴るべきなのでしょうが・・・

上手く私の気持ち書けないんですけど
今、ここを覗いて下さってる あなたに一番伝えたい言葉は

読んで下さって、本当にありがとう。

です。

恋してみないと解らなかった自分の姿。

好きになっても何ら変わらない自分。

人を好きになるって素敵なコトだけど
一つ間違えると・・・

この先、繭香が自分の気持ちを どう感じながら愛しい人を
愛していくのか？

作者である私にも まだわかりません。

案外、何でもないコトで急速に冷めたり、

嫉妬心から執着したり

はたまた上手く 二つの顔を女優のように使い分けたり・・・

さて、あなたはどんな愛し方や 愛され方をしていますか？

そしてこの「青い炎」という言葉を題材として 私にくれた人は
この「青い炎」という言葉を どういう風に解釈しているのかも
私、個人としては、とても気になるところですが・・・。

2011/09/17記

弥馬都_YAMATO

覗いてくれて ありがとう～独りごと

この本を書き始めた時、「読んで下さい」等の
宣伝活動は一切していませんでした。

しかし・・・

ど素人の上、PC操作も苦手な私自信、
読んで下さる方がいるのかすら考える余裕もなく

『月の裏で逢いましょう』

『青い炎』

『月の裏で逢いましょう～彗星の乾いた悲鳴』

の3冊を今日現在、手がけています。

いきなり本という形で書きだし 皆様にこうして
覗いていただいているわけですが、きっかけは
ある方の「こんなHP見つけたよ」という一言によるものでした。

「詩の書いてみたよ～！読んでね」と先に出版？されたので
こう見えて？←(謎の人？設定ですし、顔写真も公開してませんが・・・(笑))
負けん気のようなものが強く

「えっ！！！！なら私も書かなきゃ～」の感覚でイキナリ・・・

しかも下書きも構想も何もないまま走り出してしまいました。

中学生の頃から詩的なものを書くのが好きでしたが
答案用紙の裏に書いたりして 今現在はその頃、
自分がどんな詩を書いていたのかも覚えていません。

ただ一つ言えるのは～

私は言葉自体を大切に生きています。

おはよう や ありがとう ごめんなさい

美しいものを見て美しいと思う気持ちも 心の中にあっては
周りの方に届けられませんか？

好きなモノは好き。

そんな考えで育ちました。

残念ながら表現力は乏しいようですが・・・

こうして

書いていく上で段々と欲も出てきました。

「ここに、こんな変わった本がありますよ～」

と自ら声を出すコトによって、もっと多くの人に

覗いてもらいたい。

そして出来れば読んでどう感じて下さったのかが

知りたい。と～

そういう考えから 今はツイートして少し宣伝しちゃってます。

ツイッターも慣れてませんが・・・

この本の冒頭で書いたコトと今現在が違ってきたので

ウソついたようで気持ちが悪いので この場にて訂正させて

いただきます。

私の中の私じゃない自分。

人にはいろんな顔があるのかも知れませんね・・・。

詩の中に あなたと似た人

いませんか？

2011/08/24

弥馬都__YAMATO 他、作品一覧

☆ 『月の裏で逢いましょう』

<http://p.booklog.jp/book/31321>

処女作品

☆ 『月の裏で逢いましょう 2～彗星の乾いた悲鳴～』 ほぼ毎日更新中

<http://p.booklog.jp/book/32248>

☆ 『青い炎』

<http://p.booklog.jp/book/32076>

詩のような物語小説

『青い炎』 鵜飼編は完結

。

不定期更新で続いていき

ます。

☆ 『箱の中』

2 <http://p.booklog.jp/book/38522>

詩のような物語小説

不定期更新です

2人で綴る不思議な本です。僕の半分が私、弥馬都__YAMATO です。

☆ 『Blanco』

品

blancoとしての処女作

<http://p.booklog.jp/book/32108>

☆『Blanco 2 私の半分 僕の半分』

詩集

<http://p.booklog.jp/book/33457>

☆『ブランコロンの冒険』
一小説

2人で書いているファンタジ

<http://p.booklog.jp/book/33025>

不定期更新です

☆Blanco 3 A Cup Of World カップの中の世界

<http://p.booklog.jp/book/38212>

ほぼ毎日更新中の詩集です

青い炎

<http://p.booklog.jp/book/32076>

著者：弥馬都_YAMATO

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/himitsunojikann/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32076>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32076>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.